

# 悠然として南山を望む

今 原 和 正

結廬在人境  
而無車馬喧  
問君何能爾  
必遠地自偏  
採菊東籬下  
悠然望南山  
山氣日夕佳  
飛鳥相與還  
此中有真意  
欲辨已忘言

廬を結んで人境に在り、  
而も車馬の喧無し。  
君に問う 何ぞ能く爾るやと、  
心遠ければ地自から偏なり。  
菊を採る 東籬の下、  
悠然として南山を望む。  
山氣 日夕に佳く、  
飛鳥 相いとに還る。  
此の中に真意有り、  
弁ぜんと欲して已に言を忘る。

この詩の六句目の「望」の字は、今日通行する陶淵明の詩文集の大半が「見」の字に作っており、詩題も本来の「飲

(一)『文選』卷三十 陶淵明 雜詩其の二

酒二十首其の五」にあらため、「悠然として南山を見る」という句として我が国でも広く親しまれている。私はここで、今ではほとんどかえりみられなくなってしまうこの「望」の字について、はたして「非なり（まちがいである）」と断じてよいものかどうか、ということ論ずるつもりなのだが、その前に、中国の詩の歴史における陶淵明の位置と、それから陶淵明の作品におけるこの詩の位置について、簡単に述べてみたいと思う。

三世紀前半から五世紀前半にかけてのいわゆる魏晋の時代は、中国古典詩の流れの中でもひととき重要な位置を占めている。それはひとことで言えば、知識人が五言詩という比較的新しい形式を積極的に取り上げ、その様々な可能性をためしてみた時代、ということになるうか。まず、魏の曹操・曹丕・曹植の父子を中心とする文壇では、日常生活（平穩なものではないが）のいろいろな場面での心情を詩に託すことがこころみられた。ついで、その成果をふまえて、魏晋の交替期に生きた阮籍（二一〇～二六三）は、その不安定な政情に触発されて湧きおこる深い憂いを、八十二首の連作「詠懷」の中で詠ったのである。悠久の中国文明の時間の中では、この時代はすでにそのなかばを過ぎており、人間という存在の根源的な寂しさについても、多くの人が様々な形で表現している。それらを総合したものとして、阮籍は「詠懷」の中で「殷憂（おほきな憂い）」という語を用いているが、その意味は「時間も空間も無限であり、その中に生きる人間は、何と限られた小さな存在であり、何と多くの悩みをかかえていることか」というところであろう。ただ阮籍は「殷憂」をくりかえしくりかえし詠いはしたが、「殷憂」をいかに消すかということは、詠っていない。怪力乱神を語らず、真摯に日常を生きることとを説く孔子の現実重視の倫理観は、その後の知識人が日常の外にある「殷憂のない世界」へと至る道を、どうやら封じてしまったようである。来世や天国や復活という考えを持ちにくかった彼らは、憂いを詩に詠うという行為の中に心の癒しを見出したのであろうか、五言詩という形式の可能性が示されてからのち、詩は悲哀をうたうことを中心に、その表現範囲を広げてゆく。陶淵明は阮籍の死からおよそ百

年の後に生まれているのだが、この百年という時間は、すでに成熟した文明を持つ中国の歴史の時間の中では、詩という芸術が次の段階に進むのに決して短いものではなかったようだ。「殷憂からの脱却」を詩に詠うこと。阮籍が未解決のまま残したこの大きな課題を果たしたのが、陶淵明なのである。

陶淵明は次のような表現で「殷憂」を詠っている。

世短意常多 世短くして 意は常に多し、

斯人樂久生 斯に 人 久生を樂ぶ。

「人生は短く悩みごとばかり多い。そのため人間はだれしも永久に生きたいと願っている。」(九日閑居)

生死に恬淡としている印象を与える陶淵明であるが、そうした境地に達するまでには、世間の人と同様の、いやそれ以上の、死に対する悲しみの心があつたことは、彼の「從弟仲德を悲しむ」詩一首読めば容易に想像できるであろう。したがって、ここで他人事のような口調で語られる不老不死への願いは、実は陶淵明の心の中でもしばしば頭をもたげたものと考えてよからう。だが、不老不死を実現した者など、周囲を見渡しても一人もおりはしない。歴史をひもといても、怪しげな記録が残るばかりだ。ものごとをとことん調べつくし考えつくした末に「どうしようもない」という結論に達することを「諦」という。陶淵明は様々な悲しい現実遭遇したあとで、人間の死に対して「諦めた」ようである。

既來孰不去 既に來たる 孰か去らざらん。

人理固有終 人の理 固より終り有り。

「この世に生まれたからには、死なないことはありえない。人生のことわりとして、生には必ず終わりがある。」(五月旦の作、戴主簿に和す)

死を諦めること、生と死を相対化して死の悲しみや恐れを消し去ろうとする考えは、すでに道家の思想の中に見える。だが、道家の語る寓話は、それが人の頭の中で作られたものであるため、頭で理解できても心の中には何か割り切れないものが残ってしまう。陶淵明は、我々人間を含めたあらゆる生物が共に生きるこの世界（自然）を、深くあたたかく見つめている。不老不死などもありもしないことを考えて、生に執着し死を恐れ悲しむのは、おそらく人間だけであろう。その愚かさを知るために、人間は、みずからを世界（自然）の中に置いたときの、おのれ自身の存在の矮小さを、まず知るべきだと、彼は考えているようだ。

天地長不没

天地は長えに没せず、

山川無改時

山川は改まる時無し。

草木得常理

草木 常理を得て、

霜露榮悴之

霜露 之れを榮悴せしむ。

謂人最靈智

人は最も靈智なりと謂うも、

獨復不如茲

ひとり復た茲くの如くならず。

適見在世中

適 世の中に在りと見るも、

奄去靡歸期

奄ち去りて帰期靡し。

「天地は永遠にほろびないし、山川も姿を改めることはない。草や木も、霜や露が降りるごとに榮えたりしぼんだりして、一定不変の法則をもっている。ところが人間だけは万物の靈長だというのに、そうではない。（人間は天地・山川・草木とちがって）たまたまこの世に生きていたかと思ううちに、たちまちあの世に去り、二度と帰ってくる時はないのだ。」（形、影に贈る）

山川自然は言うに及ばず、人は草木よりもはかない存在であると言うのだ。随分と悲しく残念な結論ではあるが、不思議と心が傷まないのは、今述べた陶淵明の深くあたたかなまなざしのせいだろうか。人間という生物の死を自然の大きな営みの中で考えた場合、それは当然のことであり、何ら悲しむに足らない。つまり、人間は自然の一部である、という認識である。だがしかし、陶淵明は決して人間は自然の一部にしかすぎない、と卑下しているわけではない。そんなことを考えたなら、「殷憂」はますます深まるばかりである。尊大にもならず卑下もせず、自然の大きな営みの中に融けこんで生きている人間の姿を見たとき、陶淵明はそこに「殷憂」を解消してくれる安らぎと美を発見した。そして、そのような視点を与えてくれたのが、ほかでもない、農民の姿であり、農民として生きることであつた。

春秋多佳日

春秋には佳日多し、

登高賦新詩

高きに登つて新詩を賦す。

過門更相呼

門を過ぐれば更相呼び、

有酒斟酌之

酒有らば之れを斟酌す。

農務各自歸

農務には各自帰り、

閑暇輒相思

閑暇には輒ち相思う。

相思則披衣

相思えば則ち衣を披き、

言笑無厭時

言笑して厭く時無し。

此理將不勝

此の理 將た勝らざらんや、

無爲忽去茲

忽かに茲より去るを爲す無かれ。

衣食當須紀

衣食 當に須く紀むべし、

力耕不吾欺

力耕<sup>りきこう</sup> 吾れ<sup>われ</sup>を欺<sup>あざむ</sup>かず。

「春と秋は晴れた日が多く、小高い丘に登って詩を作り合う。門前を通りかかれば、たがいに声をかけ合い、酒があればともに酌みかわす。野良仕事のときはそれぞれ家に帰るが、ひまになるとすぐ思い出す。そしてさつそく着物をひっかけて訪れ、談笑して厭くことがない。

こうして暮らす道理こそ何よりもまさっているのではなからうか。軽がるしくこの土地を捨ててよそに移るべきではない。衣食はよろしくみずからの手で作り出すべきもの、懸命に耕作にはげめば、裏切られることはないはずだ。」

(移居其の二)

卉木繁榮

卉木<sup>きぼく</sup> 繁榮<sup>はんえい</sup>し

和風清穆

和風<sup>わふう</sup> 清穆<sup>せいぼく</sup>たり

紛紛士女

紛紛<sup>ふんぷん</sup>たる士女<sup>しじょ</sup>、

趨時競逐

時<sup>とき</sup>に趨<sup>はし</sup>り競<sup>きそ</sup>い逐<sup>お</sup>う。

桑婦宵興

桑婦<sup>そうふ</sup>は宵<sup>よる</sup>に興<sup>お</sup>き、

農婦野宿

農夫<sup>のうふ</sup>は野<sup>の</sup>に宿<sup>やど</sup>る。

「草木が繁茂し、おだやかな風が吹いて、地上は平和そのもの。このときを待ちかねたように、男も女も先を争って季節ごとの農作業にはげんだ。桑つみ女は夜中に起き出して桑をつみ、農夫は野宿までして家に帰る時間を惜しんだ。」(勸農)

「移居其の二」の詩がみずから農民として生きる詩人や仲間の姿を地上の高さで描写しているのに対して、「勸農」のこの句は、陶淵明がなんだか神様にでもなったような、とんでもなく高いところからの描写のように思える。そし

て、それはそのまま、彼の到達した境地の高さなのではなからうか。陶淵明はよく「自然詩人」とか「田園詩人」とか「隱逸詩人」とか評されることがあるが、彼にとって自然は決して、単に賞でるものではない。もし賞でると言う言葉を使うなら、彼はみずからをも含めた人間全体を自然の中に置いて、よしとして賞でるのである。「殷憂」からの脱却はこのようにして詩に詠われたのである。

さて、こうした理解のうえに立つてこの「飲酒其の五」、「文選」では「雜詩其の一」を見た場合、後半六句の意味もおのずから明らかになろう。

前半四句で言うとおり、陶淵明の心は遠く俗世間を離れている。彼の心は、真なるもの善なるもの美なるものを受け入れるのに、何らさまたげになるものを持っていない。菊の花を採むのも、その菊の花を美しいと思ったからであり、この時点で、陶淵明の心はすでに自然と一体となっている。そして次に、ゆったりとした気持ちで南山を眺める。南山は美しかった。美しいものをもうひとつ見出したことによつて、彼の心はさらに深く自然の中に融けこみ、より美しいものになった。その南山の姿をさらにまた美しくいふものとして、夕方の「山氣」がある。夕日が沈む一瞬、あたりが赤く明るく輝き、南山にかかるもやも赤く染まる。寝ぐらに帰る鳥たちの姿も一層の風情を添えている。だが、南山はみずから美しく飾ろうとして「山氣」や「帰鳥」を呼んだわけではないし、「山氣」や「帰鳥」も、南山を美しく飾ろうとしてやつて来たわけでもない。すべては自然の営みの中で起きたことなのだ。虚飾を棄て傲りを棄ててみずからを自然を構成する要素のひとつと位置づけて、そうしてその自然と一体化して生きるとき、人は美しくなり、「殷憂」からも解き放たれる。そうした「真意」に自分はいま一瞬到達したと直感した、というのがこの詩の意味であらう。

このように考えてくると、六句目の「望」の字は、やはり通説どおり「見」に作るほうがよいように思えてくる。「望」は「眺める」という意味であり、「見」は「見える」「眼に入る」という意味である。つまり、意図的動作であるか否かのちがいなのであるが、自然と一体化した情況のもとでの用語としては、確かに「見」は「望」に勝る。北宋の大詩人蘇東坡は次のように言っている。

「菊を採りて而うして南山を見る、境と意と会<sup>かい</sup>して、此の句最も妙処有り。近歳の俗本、皆南山を望むに作る。則ち此の一篇、神氣都て索然たり。」（東坡題跋卷二）

なにしろ、詩文書画、芸術全般に通じた天才の発言である。蘇東坡がこんなことを言い出してから、議論はいかに「見」の字がよいかという方向にむかってしまった。今に至っても情況は変わらない。数少ない例外として、一九五六年に王瑤氏が『陶淵明集』を公にし、その中で本文を「悠悠望南山」として、注に「望南山、一に見南山に作る」といつているのが眼につく。しかし、これとても、翌五七年李嘉言氏によって否定<sup>(三)</sup>され、比較的最近でも、例えば、王孟白氏の『陶淵明詩文校箋』の中で「近年、王瑤の『陶淵明集』編注、見を改めて望と為し、注に云う、望南山、一に見南山に作る、と。非なり。」と一蹴されてしまっている。王瑤氏は「望南山」に作る理由を一切説明していない。だからこんなあつかいを受けてしまうのだろう。王瑤氏の『陶淵明集』は、作品の制作年代を推定して年代順に並べ、それに注をほどこしたものであるが、その注の中には、例えば、この詩の「菊を採る」を「服食するため」と解釈したり、一般には南側の山または廬山を指すといわれている「南山」を「南山之寿」、すなわち長寿のシンボルと解釈するなど、なかなかユニークなものがある。当然のことながら、反論を受けたり無視されたりしている。注というのは厄介なもので、考証の結果だけをぽんと提出したようなものだから、その考証が熟慮を重ねたものか軽卒なものか、注者の意図やレベルが伝わりにくい場合がある。よく初学の者が、工具書をたより



に同じ文字を見つけて出典とする、ということがあるが、王瑤氏は、もとより初学の者ではない。こういう解釈もあり得る、という意味の注だと私は理解しているし、『望南山』についても、『見南山』一辺到に対する警告だと思っ  
っている。

私が『望南山』を棄てがたく思う理由は、ひとつにはそれが『文選』の文字だからである。陶淵明の没後およそ百年に編集されたこのアンソロジーに残された文字は、異同の多い陶淵明の詩文にとって、まず最も信頼すべき資料と考えてよいだろう。

ふたつめの理由だが、実は『見』の字について、そのよさは十分に理解できる一方で、どこか居心地の悪さを感じてしまうのである。居心地の悪さというのは、言いかえれば、その上の『悠然』という言葉との語法的関連にどうも無理があるのではないか、ということである。などと歯切れの悪い言い方をしたのは、詩においては語法的関連を飛び越えたところに意味が成立してしまうことがあり、『見』の字は正にそのところでそのよさを発揮しているからなのである。このことは否定できない。だがそれは、陶淵明の時代においてあり得たことなのか。いささか疑問が残る。

『悠然』という言葉は『文選索引』によれば、この一例のみ。詩歌からの用例が充実している『漢語大詞典』でも、最も古い用例としてこの句を引いている。どうやら陶淵明以前に頻繁に使われていた言葉ではなさそうだ。陶淵明自身はこの他に『悠然』という言葉を一三回使っている。

日夕氣清　日夕　氣清く

悠然其懷　悠然たり　其の懷い

(帰鳥)

是以植杖翁

是を以つて植杖の翁

悠然不復返

悠然として復た返らず

(発卯の歳、始春、田舎に懷古す 其の一)

寄心清尚

心を清尚に寄せ、

悠然自娛

悠然として自ら娛しめり。

(扇上画賛)

『漢語大辞典』で「悠然」の意味として、①閑適の貌、淡泊の貌

②深遠の貌

③久遠の貌、遼闊の貌

④

憂傷の貌

⑤徐緩の貌、の五つをあげているが、その他に「悠然自得」という言葉を掲げて『晋書、隱逸伝』を

引き、「神態從容として心情閑適なるを謂う」としている。これらの用例を見ると、「悠然」という言葉は、人の心や外見についていうものではないか、と思えるのである。五言詩には、韻律の上から、二字・三字に分けるのが原則、という制約がある。この制約があるから、逆に、「見悠然南山（悠然たる南山を見る）」というべきところを倒置して、「悠然見南山（悠然 南山を見る）」と表現してもかまわないのである。だが、語法的には可能であっても、意味的には、今述べた理由で「悠然たる南山」と言うのは無理がある。とすれば、「悠然」の次に来るのは動詞でなければならぬ。ここで「見」と「望」の優劣は逆転する。意図的な動詞「望」のほうが、より自然なのである。「見」を取る人の説の中にしばしば矛盾を見出すことができる。

「悠悠然無意中望見南山（ゆったりとしてなげなく南山を眺める）」

文継才・閔振貴『陶淵明詩文訳釈』

「悠悠自得地望望廬山（ゆったりとして廬山を眺める）」

唐滿先『陶淵明集浅注』

いずれも現代語訳の本であるが、本文を「見」に作っているにもかかわらず、「悠然」の語を誠実に訳すと、「看

見（眼に入る）などの語は使えなくなってしまうのだ。また、駱玉明氏は『中国古代詩歌欣賞辭典』の中で「この『悠然』は人のさっぱりとのどかな状態であるとともに、山のしずかでゆったりとした情緒でもあるのだ」と言っているが、これなども、『悠然』を南山にかけることができない苦肉の策のように思えるのである。

私は『悠然として南山を望む』でよいと思う。『見』の字は、たしかに正しく「一字之妙」そのものであるが『望』の字であったとしても、それは決して陶淵明の世界をそこなうものではない。中国の詩は六朝時代にひとつの頂点を作り、つづく唐代の詩人はそれを乗り越えてさらに大きな頂点を作った。唐詩の世界を越えるのは、どれほど困難であつたかわからない。その偉業を達成した詩人の一人が蘇東坡なのである。彼はたまたま『見南山』に作るテキストを眼にし、その文字を称賛した。時代もすでに彼の説を受け入れるほど成熟していた。『見』と『望』、いずれが陶淵明のオリジナルかわからない。両方ともそうかも知れない。私は『見』の字に居心地の悪さだけでなく、なんとなく鼻につくものを感じている。

注(一) 四庫全書本六臣注『文選』

(二) 書き下し文と訳文は松枝茂夫・和田武司『陶淵明全集』（岩波文庫）による。以下同じ。

(三) 「漫談『悠然見南山』」（人民文学）一九五七年二月